いぶかし、この名御所にては似付ぬことなり、すべて名目に心得違多く見ゆ、泔盃なども知らで、こんはいと音語にとなへし、賀の屏風の蝶番の事は別に樣式有、

〔秋齋間語四〕賀の屏風の事、總別屏風の製、昔は丁つがひの所、上下二所に革にてわなを付、其わなへ切れを通し、それをちやうつがひのかわりにせし、屏風の本體是也、賀屏風は其切れを五色にするなり、今の几帳と云物、屏風の本體なり、

〔類聚名物考調度四〕年賀屏風

今按に、賀の屏風の事、前に樣式ありて、てうつがひは、丸き紅革を鋲にて打付て、蝶番とす、いかさまそれより昔は、組のわなにても有しなるべし、五色にするとはいぶかし、物に見えず、暗推の說なり、几帳を本體とする事は僻ごとなり、屏風几帳は、本朝の昔も西土にても異物也、その事一向の妄說なり、

〔大內裏圖考證別錄下〕四方押木　絲番屏風

東大寺鴨毛屏風、押木黑塗、穿穴在金物、金物貫紐爲番、東寺山水屏風、押木黑塗、打金銅鐶、在座金物、以紫組紐結之爲番、

〔延喜式十七內匠〕屏風一帖、略中番料緋帛五尺二寸、

伊勢初齋院裝束

五尺屏風四帖料、略中緋絁二丈、番料調布二丈、番中張料略中紫革一枚、長二尺五寸、錢形料、

〔玉海〕治承二年十一月十四日癸酉、此日中宮御產第三夜也、略中寢殿西北廊、略中副北障子、不懸簾、件障子絹障子也、立亘白綾四尺屏風、緣地白軟錦、如件茜絹也、番

〔延喜式十七內匠〕屏風一帖、略中緣料紫綾一丈四尺、

伊勢初齋院裝束